



Title	第3章 ワークショップの実例 : 2. プロダクトの例
Citation	高等教育ジャーナル, 7, 81-100
Issue Date	2000
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.7.81
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29729
Type	departmental bulletin paper
File Information	7_P81-100.pdf



3.2 プロダクトの例

(1) はじめに

平成11年11月に行われた北大教育ワークショップでの成果として得られたプロダクトを整理して掲載する。

5 グループ 40 人の参加者に対して、グループ作業が5つ課された。まず、順に課題を解説する。A～Eはグループ名である。

グループ作業Ⅰ

グループ作業Ⅰでは、「北大へのニーズと課題、原因」という標題のもとに、各グループには

「北大が求める教育像：北大の理念・目標—北大とはどういう大学であらねばならないか」(A,C)
「社会は大学に何を求めているか、その要因」(B)

「学生の問題と原因」(D)

「大学院大学としてのニーズ：総合大学としての大学院」(E)

という課題が与えられた。

グループ作業Ⅱ～Ⅳ

グループ作業Ⅱ～Ⅳでは、「授業設計」すなわち、各グループあたりひとつの授業を、与えられた条件のもとで現実に実施することを想定して設計する、という課題が与えられた。その設定条件は

「複数分野教官担当による教養科目」(A)

「小グループ方式、学生参加型授業」(B)

「専門教育における分野共通授業(学士課程)—たとえば心理、倫理関連」(C)

「専門教育における分野共通授業(大学院)—12年から実施、たとえば環境関連」(D)

「ネットワークにおけるマルチメディア、メディア教材利用授業」(E)

ということであった。グループ作業Ⅱでは、「科目名と目標の設定」、グループ作業Ⅲでは、「目標の手直しと方略」、グループ作業Ⅳでは、「授業設計手直しと評価」というステップをふんで授業設計がなされた。以上の作業により、5つの授業が提案され、以下の形式でシラバスが実現された。

「科目名」

「一般目標」

「行動目標」

「学習方略」

「評価」

グループ作業Ⅴ

グループ作業Ⅴでは、すべてのグループに対して、「北海道大学をどのような大学にするか」という課題が与えられた。

以下には、グループ作業で得られたプロダクトを順に掲載する。

これらの成果は、北海道大学の具体的な将来構想を提供している。1)北海道大学の存在の意義を示す「理念・目標」、向かうべき方向性、2)北海道大学を特徴づける具体的授業科目の提案、3)北海道大学の個性化を企てる将来構想が明確に示され、このようなワークショップがいかに生産的であるかがうかがえる。

(2) グループ作業Ⅰのプロダクト

「北大へのニーズと課題，原因」という標題のもとに各グループが作成したプロダクトを，全体発表の

ときの OHP シートに基づいて，順に掲載する。枠内は発表に用いられた OHP シートを再現した。メモは残された記録をまとめたものである。

A グループ

課題「北大が求める教育像：北大の理念・目標
北大はどういう大学であらねばならないか」

北大のかかげる理念

- ・ 北の大地に根ざした大学
- ・ 創造性，フロンティア精神を重視した教育研究

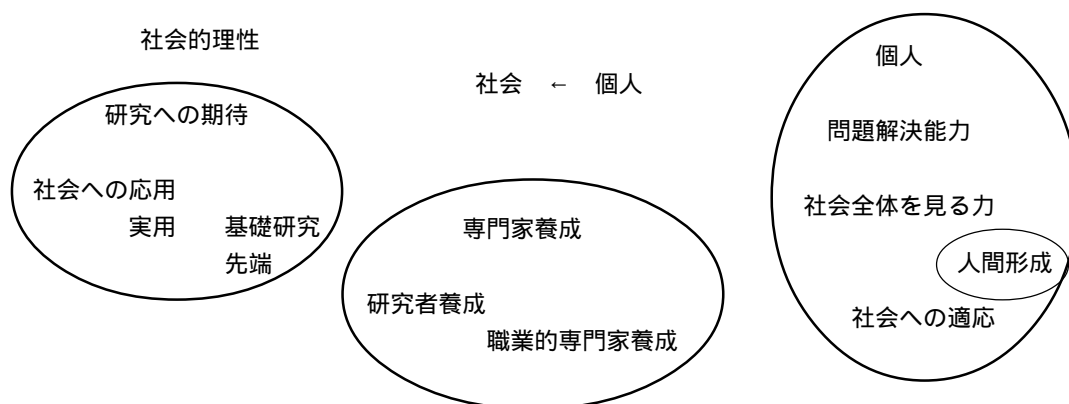
メモ

- ・ グループ作業：北大へのニーズと課題を KJ 法を用いて発想し，分類した。これには 48 枚のカードを用いた。
- ・ 北海道の地域に根ざした研究・教育を - 強すぎると「北海道」という単なる地方大学になりかねない。
- ・ キーワード：基幹大学，北，北の大地。北の大地に根ざした大学，創造性，フロンティア精神を重視した教育と研究。
- ・ 北大に特異な（独特な）理念というものは何か？
- ・ ユニークな理念を表現するのは困難
- ・ タスクフォースアドバイス：「性格」ということで考えてはどうか？

B グループ

課題「社会は大学に何をもとめているか、その要因」

- | | |
|------------|-------------|
| 1 人間形成 | 6 研究者の養成 |
| 2 問題解決能力 | 7 基礎・先端研究 |
| 3 社会への適応 | 8 社会への応用・実用 |
| 4 社会全体を見る力 | 9 社会的理性 |
| 5 職業的専門家養成 | |



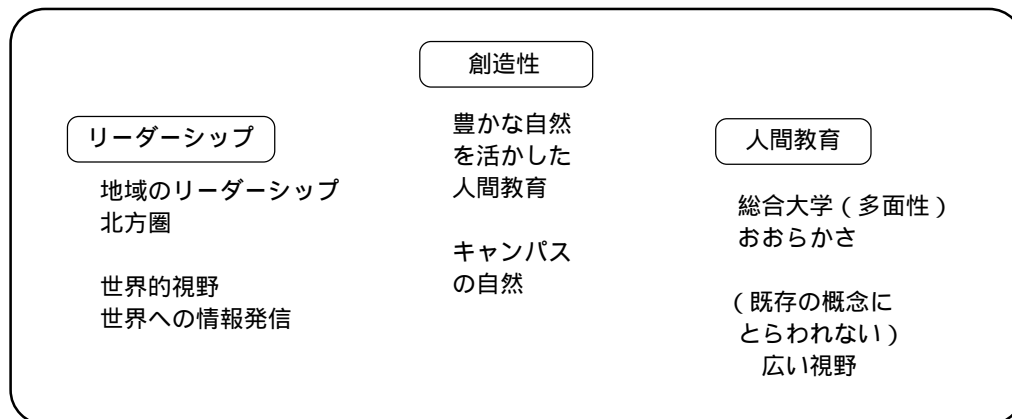
メモ

- ・KJ法によりカードを大別し、大きな島(グループ)を作り、次いで各島を分類、入れ替え、3島から12島にした。
- ・各島を個人レベルの問題から、社会レベルの問題の要求として、並べかえを行った。
- ・結果： 大学に求められるものについて、社会 - 個人の流れの順に個人の問題として、人間形成、社会への適応、社会を見る力を達成する場として大学を理解、要求している。
次いで、専門家の養成機関としての要求には研究者の養成、職業的専門家養成があげられた。第3の島として、社会との直接的なかわりとして研究への期待があげられた。そのうちわけとしては、基礎、先端的研究の場、(研究結果の)社会への応用、実用の場、(様々な分野からの)問題に対する解決能力を持つ場としての要求があげられた。
第3の島に入るか否かであるが、社会的理性を維持、発信する場としての要求というより期待があげられた。その要因として、求められるものは、社会の現状が反映されていると思われる。
- ・質問：ジェネラリスト養成も加えてはどうか？(ごもっとも！)
社会、会社等で、即戦力となる者の養成はあったか？(ありました！)

C グループ

課題「北大が求める教育像：北大の理念・目標

北大はどういう大学であらねばならないか」



メモ

KJ法によりでてきた項目をまとめると、

1. 創造性
2. リーダーシップ
3. 人間教育

が重要であることが明らかとなった。この内、創造性に関する項目が最多であった。

1. 創造性

項目が一般的なものが多く、「北大」を意識しているか？とのTFからのコメントがあり北大キャンパスの中に自然との接点が多いことが話題となり、豊かな自然を生かした人間教育を行っていくことが創造性につながるとした。

2. リーダーシップ

リーダーシップは世界のリーダーシップと地域のリーダーシップがある。北大は地域に教育を還元しつつ世界を意識することを目指す。

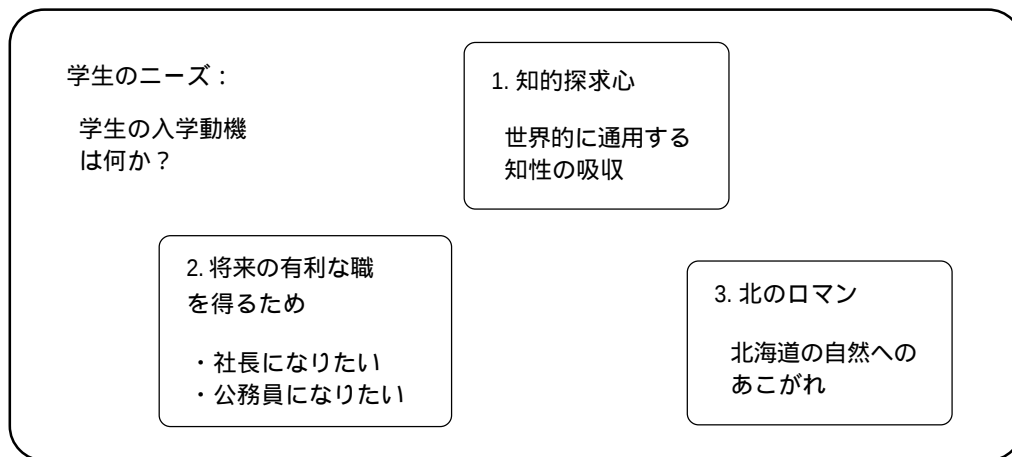
地域性を生かすというものとしては北方圏の国々との交流を通してリーダーシップを発揮できる。一方北大の歴史すなわち無から大学を造って来たフロンティアスピリットを生かし、既存の概念にとらわれない人材育成を行うことは、1. の創造性につながるものである。

3. 人間教育

総合大学としての多様性を生かし、広い視野を持つ大らかな人間教育を行うことで柔軟性を持った教育を実現できる。

D グループ

課題「学生のニーズ：学生の問題と原因」

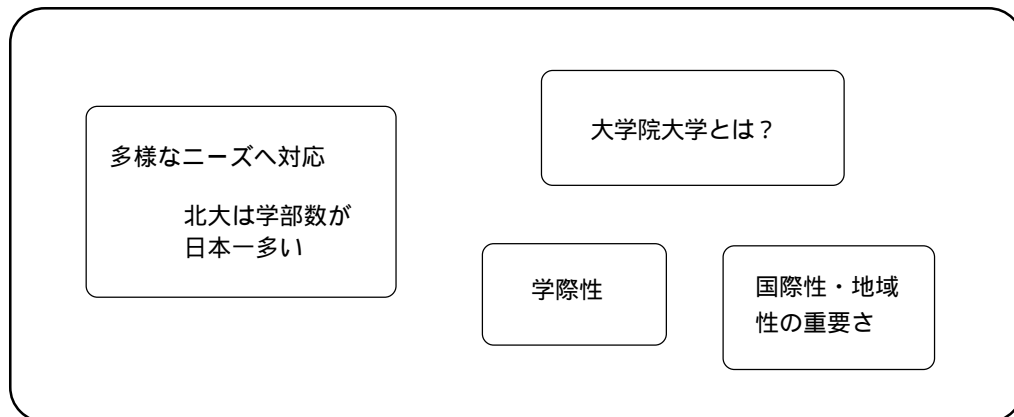


メモ

- ・学生のニーズ：学生の入学の目的，勉学の目的についてまとめる。
- ・学部と大学院：学部の方についてまとめる。
- ・キーワードの整理（数字はKJ法でのカード数）
 - 1. 知的探究心：10
 - 2. 就職，将来の経済的要求：11
 - 3. 北のロマン(人間，歴史，自然): 12
(自然：6 その他：6)
 - 4. 大学享楽型（番外）
- ・学生と教官の間にズレがあるのではないか。

E グループ

課題「大学院大学としてのニーズ：総合大学としての大学院」



メモ

1. 大学院大学としての問題整理

社会は大学院大学を理解しているか？
修士と博士のニーズの違い。
学部との違い。

2. 学際性

- 1) 北大は総合大学として多種の学部を備え、それぞれの専門領域だけでなく、複合領域の専門家を提供できる立場にある。
- 2) 開かれた学部
- 3) 専門家の再教育

3. 国際性、地域性

専門領域は地域と密着した分野
博士課程では国際性、創造性重視
開かれた大学院

(3) 各グループが作成したシラバス

ここには、グループ作業Ⅱ～Ⅳで作成したシラバスを順に掲載する。ワークショップの大半の時間を

費やして作成され、最終的なプロダクトとして提出されたものである。

グループAのシラバス（複数分野教官担当による教養科目）

【科目名】北海道の食べ物

【一般目標】

- 1 生命、健康維持に必要な食品を通して、北海道の現状と問題点を理解する。
- 2 健康・生活・文化・産業・環境などの相互的な関わりについて理解する。

【行動目標】

- 1 北海道で生産している食物について調査する。（自然・産業）
- 2 北海道で流通・消費している食品について調査する。（経済）
- 3 食品の成分について実験する。（健康・環境問題を関わらせる） 遺伝子工学
- 4 北海道を中心に、北方における食生活の歴史・文化を明らかにする。

タスクフォースの意見：このグループによる「行動目標」の表現は、「学習方略」の表現と混同している。以下のように表現を改める必要がある。

- 1 北海道で生産している食品を分類し、その産地を挙げるができる。
- 2 北海道で生産している食品の流通・消費について説明できる。
- 3 北海道で生産している食品の成分について述べるができる。
- 4 北海道の食生活の歴史・文化について説明できる。

【学習方略】

- 1 寒冷地における作物と自然環境について 講義（地球環境）
- 2 北海道の作物の品種改良 農場見学（農）
- 3 食と薬 講義（薬）
- 4 北海道産ハッカからメントールを取り出す 実験（薬）
- 5 食物とアレルギー 講義（医）
- 6 食品の安全性 実習：魚の解剖（獣医）
- 7 アイヌの食の文化と歴史 講義，体験（学芸員）
- 8 開拓の歴史と食物 講義（文）
- 9 北海道で生産されている食物の調査 (1) グループ学習（経済）
- 10 北海道で生産されている食物の調査 (2) グループ学習（経済）
- 11 食物の流通の知識 講義（経済）
- 12 食物と環境問題 講義（水産）
- 13 遺伝子組み換え食品について 講義（農）
- 14 北海道の食物（農業政策） 講義（道庁）
- 15 北海道の食品の今後の展望 パネルディスカッション（全学部）

【評価】

- ・ 1 , 3 , 5 , 6 のうち , 1 講義についてレポート。
講義に関連して , さらに踏み込んだ内容を求める 20 %
 - ・ 2 , 4 は出席重視 20 %
 - ・ 7 ~ 11 のうち , 1 講義についてレポート 20 %
 - ・ 12 ~ 14 のうち , 1 講義についてレポート 20 %
 - ・ グループごとの評価 20 %
-

グループBのシラバス(小グループ方式, 学生参加型授業)

【科目名】ゴミを考える

【概要】身近なゴミ問題を出発点として, 社会の構造を認識する。

【一般目標】

- 1 現代社会の理解のために, ゴミとは何かを考える。
- 2 ゴミを通して資源・環境・エネルギー問題を考える。
- 3 ゴミを通して歴史・文明を考える。

【行動目標】

- 1 身の廻りの問題を分析できる (認知)
- 2 調査内容を発表でき, それに基づいてコミュニケーションできる (情意)
- 3 インターネットなどを利用して世界のゴミ事情を調べ, 整理できる (認知, 技能)
- 4 ゴミ問題と社会構造を関係づける (認知)

【学習方略】

授業形態: 一般教育演習受講者 20 人を 4 グループに分ける。

- 1 オリエンテーション, グループ分け, ゴミについてバズ・ディスカッション
- 2 各グループでテーマ設定 (ブレイン・ストーミング)
- 3 各グループでテーマについての構造分析 (KJ法による)
- 4 KJ法でまとめた社会構造関連図の発表とデータファイング作戦
- 5 KJ法による関連図の完成
- 6 調査方法(図書館の使い方等), 発表方法の紹介
- 7 各グループの中間発表(2グループ)(1)
- 8 各グループの中間発表(2グループ)(2)
- 9 外部講師(e.g. 行政関係者)..... (人的資源)
- 10 見学会(e.g. ゴミ処理場)..... (人的・物的資源)
- 11 各グループの最終発表(1)
- 12 各グループの最終発表(2)
- 13 各グループの最終発表(3)
- 14 各グループの最終発表(4)
- 15 総合討論

【評価】

- ・ KJ図 10 %
- ・ 中間発表 10 %
- ・ 最終発表 40 %
- ・ 総合討論 10 %
- ・ 最終レポート 10 %
- ・ 出欠 10 %

(研究の経過と意味によって割り付け, 最終的にはレポート・討論で総合的に達成度が判定される)

グループCのシラバス(専門教育における分野共通授業ー学士課程)

【科目名】応用倫理学

【一般目標】

- 1 「倫理」とは何か, 人間社会における倫理思想の変遷を理解する。
- 2 現代社会で実際に起きている倫理上の諸問題について考える。

【行動目標】

- 1 倫理思想の変遷とその時代的背景について説明できる。
- 2 生命倫理, 環境倫理, 情報倫理, 職業倫理, 社会倫理における実際の諸問題を具体的に列挙できる。
- 3 現代の倫理をめぐる諸問題について自分の考えを理由をあげて述べるができる。

【学習方略】

- | | | |
|------------|-----------|-----------------------|
| 1 概念・説明 | 「倫理」とは何か? | 「文」 |
| 2 倫理思想史 | 歴史的変遷 | 「文」 |
| 3 現代の問題点 | 総論 | 「代表」 |
| 4 倫理と「法」 | 法律的解釈 | 「法」 |
| 5 生命倫理(1) | 講義 | 「医」「地球環境」 |
| 6 生命倫理(2) | 発表とディベート | 「医」「地球環境」 A(40名)2テーマ |
| 7 環境倫理(1) | 講義 | 「地球環境」「情報」 |
| 8 環境倫理(2) | 発表とディベート | 「地球環境」「情報」 B(40名)2テーマ |
| 9 情報倫理(1) | 講義 | 「情報」「教育」 |
| 10 情報倫理(2) | 発表とディベート | 「情報」「教育」 C(40名)2テーマ |
| 11 職業倫理(1) | 講義 | 「教育」「経済」 |
| 12 職業倫理(2) | 発表とディベート | 「教育」「経済」 D(40名)2テーマ |
| 13 経済倫理(1) | 講義 | 「経済」「医」 |
| 14 経済倫理(2) | 発表とディベート | 「経済」「医」 E(40名)2テーマ |
| 15 総合討論 | | 全員 パネル・ディスカッション |

【評価】行動目標に対して

- | | |
|-----------------------|------------|
| ・ 論述試験 | 25 % |
| 倫理思想の変遷, 現代における倫理的諸問題 | |
| ・ ディベートの評価 | 15 % × 4 回 |
| ・ 調査研究 + 発表内容 | 15 % |

評価基準(ディベート内容およびレポートについて)

評価項目(各項目について5点ずつ満点15点)

- 1 問題の所在を理解しているか?
- 2 自分の意見を倫理的な根拠に基づいて述べているか?
- 3 わかりやすい表現になっているか?

(備考1)

- 1 教官7名(文学部, 医学部, 地球環境科学研究科, 工学部, 教育学部, 経済学部, 法学部)
- 2 対象学生200名(40名ずつ5グループに分ける.....A, B, C, D, E)
- 3 留意事項
 - (1) 各々の回の関連性を事前に全教官で打ち合わせる。
 - (2) 最終回は総合討論として全員の教官が出席する。
 - (3) 5回目の授業以降, 生命倫理, 環境倫理, 情報倫理, 職業倫理, 経済倫理について2回ずつ, テーマ毎に講義・発表・ディベートを行う。
 - (4) 各回あらかじめ各グループ(40名)に上記倫理を振り当て, テーマ探し, 発表のための準備時間を与える。
 - (5) 各グループは2テーマ選び(20名×2テーマ), 発表者, ディベート者を割り当てる。

(備考2)

- 1 生命倫理の諸問題

人工受精(仮腹)の是非, 出生前診断(着床前・着床後)の是非, 遺伝子操作の是非, 患者の知る権利(例: 癌告知), 脳死移植の是非, 安楽死・尊厳死の是非, クローン技術, クローン人間の是非
 - 2 環境倫理

開発と自然保護, 地球温暖化と経済活動, 捕鯨の是非, 原発の是非, 組換え遺伝子の自然環境へのリーク
 - 3 情報倫理

ネットワークとハッカー, 情報公開とプライバシー, ホームページによる特定企業・個人の批判攻撃, 表現の自由と倫理感
 - 4 職業倫理

職業集団の身内意識と情報公開, 警察, 医療ミス, 政治家, 官僚の問題, 公務員と兼業 etc
 - 5 経済倫理

福祉と自己責任, 売買と情報格差
-

グループDのシラバス（専門教育における分野共通授業—大学院課程）

【科目名】地球温暖化問題特論

【概要】地球温暖化問題について、理学・工学・農学・経済・医学の分野から学び、総合的に問題を把握する。

【一般目標】

- 1 原因を理解する。
- 2 影響を認識する。
- 3 解決法を考察する。

【行動目標】

- 1 原因を列記し、説明できる (認知)
- 2 原因と影響の相互関係を系統立てる (情意)
- 3 具体的問題例を調査する (技能)
- 4 解決法の問題点を評価する (問題解決)

【学習方略】

- 1 イントロダクション（ディレクター：経済）

各分野講師紹介， 学生意識調査， 学部教育修了（前提）， 基本的専門用語の説明

<工学の観点から>

- 2 利便性の追求と温暖化

原因を列挙し、時間軸から人間の業を説明できる

- 3 産業別に見た環境負荷とその対応

原因と影響の相互関係を系統立てる， 具体的問題例を空間軸から調査する， 工学的な側面からのアプローチ

<農学の観点から>

- 4 温暖化に及ぼす農業の影響

耕地面積， 森林伐採， 水田・堆肥， メタン・CO₂

- 5 農業に及ぼす温暖化の影響

気温上昇・生産量・作物量（CO₂増加・水不足）

<理学の観点から>

- 6 地球温暖化のメカニズム

- 7 地球の自己修復力について将来予測

<医学的側面から>

- 8 温暖化が健康と生体に与える影響（環境・食・反応）反応（説明）

- 9 侵襲制御と治療法

<経済学からのアプローチ>

- 10（経済1）地球温暖化の原因

低開発国の森林問題（貧困の問題）， CO₂発生→経済的な発生のメカニズムを検討

- 11 税制や規制による対策 2つの対策を比較検討する
 (対策1) 環境税の創設 (市場メカニズムを通じた対策)
 (対策2) 政府による直接的介入 (行政指導など)
- 12 課題設定 (総合的) 原因→影響・反応→解決
- 13 パネル・ディスカッション (各分野の教官)
 地球温暖化を解決できるか, 各分野, 結合
- 14 4グループ発表・コメント
- 15 4グループ発表・コメント

【評価】

- ・ 第12回目に小テスト (受動的な面) 40 %
 知識:原因を列記し, 説明する
 20 % (予測をするには何が理解されねばならないか?)
 態度・習慣:原因と影響の相互関係を系統立てる
 20 % (H₂自動車への転換?)
- ・ 第14, 15回目にグループ発表 (能動的な面) とレポート提出 40 %
 技能・知識:具体的問題例を調査し, 解決法の問題点を評価する
 20 %
 レポート:自分の分野での温暖化問題を調査し, 解決法の問題点を評価する
 20 %
- ・ 第1回から第15回の出席点 20 %

(備考1)

- ・ 80人を8グループに分ける。
- ・ 第12回に各グループの課題を設定して, 第14, 15回目にグループ発表する。

(備考2)

- 1 工業 原因, 歴史的
- 2 農業 原因, 歴史的
- 3 理学 結果, 将来展望
- 4 医学 生体
- 5 経済 生活の営み, 解決

グループ E のシラバス (ネットワークにおけるマルチメディア , メディア教材利用授業)

【科目名】文明と技術への招待

【一般目標】

- 1 今日文明と技術を理解するために , エポックメイキングな技術が開花した歴史的・社会的背景ならびに当時の技術的特徴を理解する。
- 2 それらの技術の現代における利用実態を知ることによって , 文明と技術の接点のあり方を評価する。動機を確認する。

【行動目標】

- 1 古代から現代までの主なエポックメイキングな技術が展開した歴史的・社会的背景を解説できる。
- 2 当時の技術と現代の技術とを比較できる。
- 3 ビジュアルな資料から情報を読みとることができる。
- 4 文明と技術の接点について自分の意見を持ち , 他人の意見も評価できる。

【学習方略】

- 1 イントロダクション
- 2 古代エジプトと巨石技術
- 3 メソポタミア文明 (1) と暦・天文学
- 4 メソポタミア文明 (2) と灌漑 (かんがい) 技術
- 5 ギリシャ文明と材料技術
- 6 古代ローマ文明 (1) と土木技術
- 7 古代ローマ文明 (2) と都市計画
- 8 ゴシック時代と城塞技術
- 9 ルネッサンス (1) と航海術
- 10 ルネッサンス (2) と解剖
- 11 ルネッサンス (3) と印刷術
- 12 近代 (1) と蒸気機関
- 13 近代 (2) と写真・映画
- 14 現代とコンピュータ技術
- 15 まとめと展望

【評価】行動目標に対して

- ・ 出席 (2 % × 15) ... 30%
 - ・ 小テスト (2 % × 15) ... 30%
 - ・ レポート (8 % × 5) ... 40%
-

(4) グループ作業Ⅴのプロダクト

最後に、「北海道大学をどのような大学にするか」

という同じ課題のもとに各グループが作成したプロダクト（企画案）を、順に掲載する。

Aグループ

課題「北海道大学をどのような大学にするか」

1. 問題点

- 孤立性，刺激弱い，情報不足
- 2. 緑豊かなキャンパスで刺激に満ちた学園生活を！！
- 3. 学部間の交流，他大学（国内，国外）との交流を活発化する 単位互換性（マルチメディアの活用等）
学生の転部，転学科を可能にする。

方略

大学院組織の再編成
新連携大学院の創設

全学教育

開放，他学部大学院
統合
理論と応用

メモ

・北大の売り

北大の利点を生かした売りを考える。

1. 問題点

本州と離れた孤立性
北海道の刺激のなさ，弱い
情報不足（全国，本州に比べて）

北大の良さ ..（先生方は）大器晩成型 大器早成化
こうした不利な点をカバーすべき方法
控えめを減らし，早成化を図る。
強調，生き残りを図るには？

2. 理念・目標

緑豊かなキャンパス，刺激に満ちた大学生活
学部内交流・移動を盛んにする。
学部の垣根を低くする。

3. 方略

刺激 学部間交流，留学制度を充実化
単位互換性を図る。
合宿を増やす。
マルチメディアの活用

B グループ

課題「北海道大学をどのような大学にするか」

問題点

- ・ 教育機能の低下
- ・ 国際化、情報化に対する組織の遅れ
- ・ 就学年令人口の低下
- ・ 北大の特色を生かした研究、教育体制になっていない。

ポジティブな背景

- ・ 総合大学である。
- ・ リベラルアーツの歴史をもつ。
- ・ 地域として取り組むべき課題がある。

理念・目標

北方圏東アジア
基幹大学

方略

人的資源

地域社会対応型の開かれた大学。
生涯学習体制。
留学生受け入れ、派遣。
教員の交流。
行政との交流。
単位互換、単位認定の充実。
民族問題への取り組み。
学士入学の柔軟化。
大学院組織の再編成。
新連携大学院の創設。

物的資源

演習林、農場、練習船等の
北方圏のフィールドサイエンスの基地化

メモ

・ アイデア

- ・ 外国からの留学生
中国・韓国への広報活動
- ・ 学生の指導の教育の充実
- ・ 国際化
- ・ 生涯学習
- ・ 地域社会との連携
- ・ 民族問題・北方民族
- ・ 事務組織の問題

北方圏構想

北方圏・東北アジアの中軸大学へ

問題点

- ・教育機能の差別化
- ・国際化・情報化が進んでいない。
国際化・情報化に対する組織的体制の遅れ
- ・学齢人口の低下
- ・北大の特色を生かした研究・教育体制になっていない
- ・新しい分野の開拓が近年少ない。

ポジティブな拝啓

- ・総合大学であること
- ・リベラルアーツの歴史
- ・地域として取り組むべき課題がある。

理念：

北方圏東アジア基幹大学

方略：

北方圏構想の促進

- ・人的資源＝地域社会対応型の開かれた大学
生涯学習体制
留学生受入れ・派遣
教員の交流
行政等との交流
単位互換・単位認定の充実
民族問題への取り組み
学士入学の柔軟化
 - ・物的資源
演習林，農場，練習船
→北方圏のフィールドサイエンスの基地化
 - ・大学院組織の再編成
新連携大学院の創設
-

C グループ

課題「北海道大学をどのような大学にするか」

目標

学内の人的交流を高める。
学生の将来の進路の多様性を高める。

具体的方略

学部間カリキュラムの単位互換性を高める。
他学部卒業者（修了者）の学部編入の拡充をはかる。
学内サバティカル制度の創設

メモ：

1. 目標（提言）

- (1) 学内の人的交流を高める。
- (2) 学生の将来の進路の多様性を高める。

2. 具体的方略

- ・ 学部間で単位互換性を高める。
(1) , (2) の実現
- ・ 他学部卒業者の他学部編入の拡充をはかる。
(2) の実現
- ・ 学内サバティカル制度の創設
(1) の実現

補足：討論の過程

総合大学のメリット

学部横断 教育交流
学部間協力

人的交流

単位の互換性

（ 編入学の可能性）

学生の進路選択の多様性

（縦割り入学のデメリット

卒業後の進路変更の可能性

広い視野をもつ研究者の育成

旧教養部への移行）

実現不可か！！

学部の改編 現実には無理！！

学内サバティカル制度

教官交流

多様な研究・教育の可能性

D グループ

課題「北海道大学をどのような大学にするか」

問題点

- 1) 部局における縦割り
- 2) Leadership を持つ人間育成の停滞。

世界的なリーダーの育成

新規発明，企業を起こす
大学院レベルでの
留学生の大幅な受け入れ
(英語授業)
社会人教育の推進
(After 5)

理念，目標，方略

Generalist を大学院レベルで育成
全学共通授業
新分野の開拓能力の養成
北方自然環境，文化，
北方圏の立地を生かす
2, 3 研究科共通授業

メモ

1. 問題点

- 1) 学部大学院における縦割り教育
- 2) 横断的・境界領域講義の不足
- 3) 世界的リーダーシップをもつ人間育成の停滞
- 4) 少ない学部間交流

2. 目標・方略

- 1) ゼネラリスト・境界領域研究のできる人材育成
- 2) 新分野開発の促進
(北方圏を考慮した)
- 3) 世界的リーダーシップ 人材育成
- 4) 伝統を保持しつつ学部間交流促進
- 5) 社会人教育の推進・一般人への校舎開放
- 6) 留学生の大幅な受入れと海外研修制度の充実
(北方圏を考慮した)

E グループ

課題「北海道大学をどのような大学にするか」

問題点

足りないものを補う？
現在あるものに付加？
総合大学における
芸術学部ニーズが高い

理念・目標

日本で最初の
芸術と科学技術を融合した
総合大学を目指す。

方略

- ・既存学科との連携。
- ・他大学、他機関との連携。
- ・ Visual Art
（映画、写真、工業デザイン、
情報デザイン、観光 etc ）
- ・ Performance
（音楽、演劇、舞踊）

メモ

問題点 芸術系が弱い。

- ・足りないものを補う。
- ・現在あるものに付加
芸術学部を新設
観光学部 デザインが貧弱
デザイン関係で取り込める。
実現可能な点、理論、デザイン。 現在は零
理念：開拓者精神、国際性
特徴：学部が日本一多い、チャレンジ精神
スクラップ・アンド・ビルド 建築などのデザイン関係

理念・目標

総合大学における芸術学部のニーズが高い。
バックグラウンド：日本で最初の芸術と科学技術を融合した総合大学を目指す。

方略

学問の関連学部関係をスクラップ・アンド・ビルドで取り込む。

実現の可能性

既存学科との連携 他大学の他機関との連携
Visual Art：目を養う（映画、写真、工業デザイン、情報デザイン、観光 etc ）
Performance：表現力を身につける（音楽、演劇、舞踊）